起　舟

「特別展　氷見の漁業と漁村のくらしⅡ」（氷見市立博物館 2001 年編・刊、50 頁・51 頁）

起舟は、一般にはキシュウ、あるいはキッシュウとよび、元来は「舟起し」とも称される舟霊サマの祭りだった。２月１１日の漁業の事始めの日に際して、大漁を予祝し、豊漁と安全を祈る舟祝いの日でもあった。そのため、現在でも起舟当日には各漁港に繋留される漁船に大漁旗を立て、祝意を表している。商家では、この日を記帳始めの日として、大福帳の上書きなどをした。また、起舟当日は「水主揃（かこぞろ）いの祝い」を兼ねて、氷見浦では昭和１０年代頃まで秋網（鰤網）・春網（鰯網）・夏網（鮪網）など、三季網の船元ごとに各々の網に従事する水主連中を招いて、盛大な祝宴が開かれた。当日夕方から催される祝宴の献立はたいそう豪勢で、タラの子付けやイカの刺身のほか、シイタケ・クルマ麩・人参・レンコン・昆布などの入ったモチ椀、人参と大根に焼いたブリの頭の身をほぐし入れたナマス、黒豆の煮豆、茹でたメジマグロの身をほぐし入れた豆腐のアンカケに、この頃が旬のタラのオツケ（味噌汁）などを肴に、招かれた１０人から２０人余りの水主等は盛大に呑んだ。

戦後の漁業法改正後、船元による網単位の起舟のヨバレ(祝宴)は下火となった。灘浦の藪田地区では、明治時代は藪田の船溜りに繋留してある船上に、垂姫神社に奉納された朱塗りの大盃を据えて起舟の祭典を行った、という。戦後は、同所の浄土真宗本願寺派光福寺を借りて、起舟の祝宴が行われるようになった。さらに、昭和３０年代以降は、藪田観光の大漁鍋を会場に大勢の招待客を招いて、村の新年会を兼ねて祝宴が行われるようになった。近年は、前日のえびす講の翌日、予め希望者を募って近隣の民宿で祝宴のみが行われている。一方、隣接する小杉地区では、同じく２月１１日昼頃に地区に菊池姫像石神社での祈年祭に引き続いて、起舟祭の祭典が斎行される。祭典終了後、地区内の民宿に席を移して祝宴が行われる。ただし、出席者は漁猟関係者だけでなく、村の新年会を兼ねて催されているので各家から当主等が多数参加する。また、当日祝宴会場に据えられる朱塗り大盃は、藪田垂姫神社のそれに倣って後代につくられたものだ、という。現在、起舟当日には、氷見浦や灘浦では青竹に大漁旗が、北接する七尾市の能登灘浦では葉付きの竹に大漁旗を飾っている。また、個人で操業する刺網のほか小網や釣物漁師等は、起舟当日の漁を終えて帰港すると、ミヨシ(船首)や機関、トモ(船尾－舵)に御神酒を注いで大漁と無事安全を祈っている。

大盃（小杉地区）

薮田地区の起舟で、朱塗り大盃を囲む漁師たち（昭和30年代頃）。